

The Playful Secrets of Hokusai in 'The Great Wave'

新しい千円札の裏面に描かれた葛飾北斎の「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」。最も人気がある浮世絵作品といわれ、海外でも「グレートウェーブ」の名で親しまれています。実は北斎はこの絵にある遊び心を込めているといいます。新紙幣を眺めながら200年前の文化に思いを馳せてみませんか？



1. Article

Read the following article aloud.

Japan's new [banknotes](#), introduced in July, feature the renowned ukiyo-e print *The Great Wave off Kanagawa*, an image of a great wave and Mount Fuji by Katsushika Hokusai, on the backside of the 1,000 yen note, which honors medical scientist Shibasaburo Kitasato. While this image is internationally famous, a hidden detail in the artwork, understood by Edo locals 200 years ago, is often overlooked today. The print is not just about dramatic waves and Mount Fuji but also celebrates the first bonito catch (*hatsu gatsuo*). Hokusai's playful touch can be seen in the three boats shown, which are actually *oshokurisen*, high-speed vessels used to transport freshly caught bonito to Edo.

The *oshokurisen* boats [set out from](#) the Nihonbashi fish market in Edo, buying bonito from fishermen off the Miura Peninsula and returning by night, guided by the North Star. Edo locals eagerly awaited the first bonito of the season, a prized and expensive [delicacy](#). Hokusai's [depiction](#) of the waves reflects this excitement, with the blue, navy, and light blue stripes [resembling](#) the traditional *katsuo-jima* pattern seen on kimonos, symbolizing bonito. Even the brown-tinted sky in the artwork hints at the mustard miso often paired with bonito sashimi.

Hokusai employed the *rusumoyō* technique in *The Great Wave*, where the central subject is represented through related imagery rather than being directly shown. This method captures the spirit of the first bonito catch without explicitly depicting it. The towering waves, boats, and Mount Fuji all contribute to this hidden subject, illustrating the bold and optimistic spirit of Edo locals who valued seasonal flavors and the joy of the first bonito catch.

Source : The Playful Secrets of Hokusai in 'The Great Wave'
[JAPAN Forward](#)

2. Key phrases and vocabulary

First repeat after your tutor and then read aloud by yourself.

1. **banknote** <英>紙幣、銀行券 (= <英>note, <米>bill, bankbill)

I found an old **banknote** in my grandfather's drawer.

2. **set out from** ~から出発する

The explorers **set out from** base camp to reach the summit.

3. **delicacy** ごちそう、珍味、繊細さ、優美さ、か弱さ、気配り、心遣い

In some countries, snails are a popular **delicacy**.

4. **depiction** 描写、表現、叙述

The book provides a vivid **depiction** of life in ancient Rome.

5. **resemble** ~に似ている

She really **resembles** her mother in both looks and personality.

3. Questions

Read the questions aloud and answer them.

1. What hidden detail in The Great Wave off Kanagawa is often overlooked today?
2. What were the oshokurisen boats used for in the artwork?
3. How does Hokusai's use of colors and patterns reflect the theme of bonito?
4. What technique did Hokusai use in The Great Wave, and what is its purpose?
5. Seasonal foods were important to Edo locals. Are there any seasonal foods that you especially look forward to each year?

4. 日本語関連記事： 北斎が「グレートウエーブ」に込めた遊び心とは 描かれなかった主役…ヒントは船、波、空

本ページは出典記事原文の日本語訳です。本教材の要約英文の日本語訳ではありません。

新紙幣が発行されて約2カ月。医学者の北里柴三郎が配された千円札を受け取る機会が増えてきた。その裏面には江戸の浮世絵師、葛飾北斎が描いた大波と富士山の絵が配されている。海外では「グレートウエーブ」の名で親しまれ、浮世絵の中で最も人気があるといわれる作品だ。

実はこの絵に北斎は、ある遊び心を込めている。200年前の江戸っ子には以心伝心の仕掛けだが、海外はもちろん、現代の日本でも理解されなくなっている。名作「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」の紙幣デビューを機に、改めてグレートウエーブの謎解きをしてみよう。

この絵については、場所での思い違いをしている人も少なくない。かなりの人が相模湾と思っている。

絵の左端に「神奈川沖」と書かれているにもかかわらずだ。

現代の横浜沖である。だから、舞台は江戸湾なのだが、崩れ落ちる大波の姿で太平洋を連想してしまい、左端に記された「神奈川沖」の文字に注意が向かないのだろう。

美術評論などでは手前に配された「動」の大波と画面奥の「静」の富士山の対比の妙が称賛されがちだ。構図についてはその通りだが、それで終わりの鑑賞では北斎が嘆く。

この名作は初鯉（はつがつお）に寄せた浮世絵なのだ。北斎の遊び心に気付くためのヒントは3艘（そう）の船にある。大波と富士見物の船ではない。4人ずつ、両舷で計8人の人影は、船のこぎ手なのだ。

八丁櫓（はっちょうろ）の船の名は「押送船」。「おしょくりせん」の名で知られた鮮魚運搬用の高速艇。舳先（へさき）の向きからみて、江戸湾口を目指して進んでいるところだ。

江戸っ子は、この船を見るとぴんときた。湾口の三浦半島付近の海に鯉を買い付けに行くことを誰もが知っていた。そのことは当時の川柳からもうかがえる。

「初鯉むかでのよふな船に乗り」「押送りつつ七十五本積み」

ムカデのような船とは両舷に計8丁の櫓が突き出した押送船のこと。

たった75本は初鯉の数。江戸時代には、初物を食べると75日長生きする、といわれていたので、そのことを踏まえた川柳だ。

初鯉は高価だった。文化9（1812）年の旧暦3月末には、1匹3両で話題になっている。現代の12万円相当だ。

出典：北斎が「グレートウエーブ」に込めた遊び心とは 描かれなかった主役…ヒントは船、波、空
[The Sankei Shimbun](#)

4. 日本語関連記事： 北斎が「グレートウエーブ」に込めた遊び心とは 描かれなかった主役…ヒントは船、波、空

本ページは出典記事原文の日本語訳です。本教材の要約英文の日本語訳ではありません。

鯉の魚群は毎年、早春に九州方面に現れ、黒潮に乗って列島沿いに北上を開始する。その回遊途上の旧暦4月ごろ、相模や房総沖に到達したところを漁獲したのが初鯉なのだ。

押送船は夜明けに日本橋の魚河岸を出発。三浦半島沖の漁場で、釣りたての鯉を漁師から買い付けた。荷を積んで戻る途中で日が暮れる。夜の海上では北辰（北極星）を目印に力漕した。未明に日本橋に到着すると、待ち構えていた鯉売りが盤台をかついで掛け声を発しながら江戸の町に駆けだした。

4月も末になれば入荷も増える。値段は高いものの少し下がるので庶民はそれを待ったのだ。

北斎は押送船が乗り切る波の筋模様と色彩を、鯉の暗喩として用いている。波を描いた紺と青と水色の縞（しま）模様は「鯉縞」と呼ばれる着物の意匠。江戸時代の人々は、この縞模様を見ると瞬時に鯉の姿を脳裡（のうり）に浮かべたはずである。

江戸湾内であるにもかかわらず、これだけの大波にしたのは、初鯉大漁への景気づけだろう。江戸っ子の心意気。遠景の富士山は、被った雪の量で初夏の時節を示している。

白い雲の形も不思議。よく見れば「大」の字だ。これも大漁と結びつく。

さらに、茶色がかった空の色も気になるはずだ。黄砂の空とも思う人がいるかもしれないが、ともかく海の青さを強調する上で成功している。

だが、対比の効果を上げた、この空の色彩は、黄砂ではなく芥子（からし）味噌（みそ）の暗示のはずである。

「梅に鶯（うぐいす）かつほにはからしなり」。この七五五の句にあるように、江戸時代の鯉の刺し身は芥子味噌で賞味されていたのだ。

これだけの根拠がそろえば、大胆な構図と波の描写で世界中の人々の心を鷲（わし）づかみにした北斎の「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」の浮世絵が、金銭感覚を無視して季節感と鯉の食味を追求した江戸っ子の粋と共鳴していたことが、お分かりいただけることだろう。

江戸の芸術には「留守模様」という技法がある。主役を描かずに、関連する事物を配して主役を表現するという知的な画技だ。

例えば刀の鐔（つば）では、鯛と釣竿（つりざお）だけが彫金されたものがある。これは恵比寿神の留守模様。遠景に富士山が描かれ、手前の地面に笠（かさ）と杖（つえ）だけが置かれた「富士見西行」もある。

主役が図柄に不在なので留守模様。北斎の名作は初鯉の留守模様なのだ。

出典：北斎が「グレートウエーブ」に込めた遊び心とは 描かれなかった主役…ヒントは船、波、空
[The Sankei Shimbun](#)